



同性愛者に対する態度の規定因：  
ジェンダー自尊心の心理機制の観点から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 文子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/0002000304">http://hdl.handle.net/10466/0002000304</a>

氏 名 鈴木 文子

学 位 の 種 類 博士 (文学)

学 位 授 与 年 月 日 2023年3月31日

学 位 論 文 名 同性愛者に対する態度の規定因—ジェンダー自尊心の心理機制の観点から—

論文審査委員 主査 佐伯 大輔

副査 山 祐嗣

副査 石田 佐恵子

副査 (外部委員) 池上 知子

## 学位論文の要旨

現在、人々の性の多様性が可視化されつつあり、様々な性のあり方を認めようといった社会的風潮がある一方で、依然として性的マイノリティに対する偏見や差別も存在している。本論文は、性的マイノリティの中でも同性愛者に焦点をあて、同性愛者に対する偏見や差別をいかに解決していけるのか、その糸口を見つけることを目的としている。

これまでの異性愛者の同性愛者に対する態度研究からは、男性異性愛者は女性異性愛者よりも同性愛者に対して否定的であることが確認されている (Kite & Whitley, 1996)。本論文では、こうした性差に焦点をあて、その規定因を明らかにすることとした。なぜ、女性異性愛者は男性異性愛者よりも同性愛者に対して寛容な態度を示すのか。その背景にある心理機制を読み解くことで、同性愛者に対する偏見や差別の解決については様々なセクシュアリティの人たちが共生できる社会の実現に向けて、どのようなアプローチが有効なのか示唆を得ることを試みた。

本論文の序章ではこれまでの先行研究の議論を整理した。男性異性愛者が同性愛者 (主にゲイ) に対してなぜ否定的態度を示すのかといった点に関しては、Falomir-Pichastor & Mugny (2009) の社会的アイデンティティ理論に基づく心理機制に注目した。社会的アイデンティティ理論とは、自身が所属する集団 (内集団) に対してアイデンティティ (帰属意識や愛着) を持つとき、内集団が外集団と比べて良いと感じられることで自身の自尊心が高まるとされている (Tajfel & Turner, 1979)。したがって、人には社会的アイデンティティに基づく自尊心を維持しようと、内集団を外集団よりも肯定的または外集団を内集団よりも否定的に評価するといった心的

メカニズムが備わっており、そのため社会における偏見や差別などの様々な集団間葛藤が生じると考えられている。実際に、男性異性愛者は男性集団成員であることで得られる誇りや自信（ジェンダー自尊心）を維持するために同性愛者に対して否定的態度を示す傾向が確認されている（Falomir-Pichastor & Mugny, 2009）。

一方、女性異性愛者の同性愛者に対する態度について Falomir-Pichastor & Mugny (2009) は、同性愛者とジェンダー自尊心との間に有意な相関関係がみられなかったことからそれ以上の詳細な検討は行っていない。本論文では、女性異性愛者においても男性異性愛者と同様、同じ女性集団成員であるレズビアンに対して否定的態度を示すことで、女性としてのジェンダー自尊心を維持防衛するといった心理機制が備わっているが、一方でそうした否定的態度を抑制している要因があるのではないかと考え検証していくこととした。男性異性愛者のゲイに対する態度と女性異性愛者のレズビアンに対する態度における性差（前者の方が後者よりも否定的）が生じる要因を考慮して、本論文では2つの仮説「性役割規範の厳格性仮説」および「性役割規範の特性仮説」に集約した。第1章から第3章の各研究を通じてこの2つの仮説を検証し、終章では各研究結果を踏まえて、同性愛者に対する偏見解決に向けての考察を行った。

**性役割規範の厳格性仮説** Kite & Whitley (1996) の議論によると、人々はジェンダー信念に基づき、伝統的に男性らしい男性や女性らしい女性といった一定の枠組みから逸脱する（と知覚される傾向にある）同性愛者に対して否定的態度を示すといえる。さらに、一般社会においてジェンダーに対する信念は女性よりも男性において厳格だといわれている（Herek, 1986, 1993）。こうした主張を踏まえると、女性異性愛者においてはジェンダー自尊心を維持防衛するためにレズビアンに否定的態度を示す動機づけ自体が男性異性愛者よりも弱いと考えられる。言い換えれば、男性異性愛者ほどには女性異性愛者はジェンダー自尊心を維持するためにレズビアンに対して否定的態度を示す必要性が低い。その結果、相対的に男性異性愛者のゲイに対する態度がより否定的になるといえる。

**性役割規範の特性仮説** 一方で、性役割規範の厳格さだけでなく、性役割規範の特性が男女で異なることから同性愛者に対する態度に性差が生じているのではないかというのが2つ目の仮説である。女性性の中核となるものは共同性（Bakan, 1966）とされており、その共同性の中には思いやりをもって人と接することなどが含まれる（土肥・廣川, 2004）。こうした女性性の特徴を考慮すると、ジェンダー自尊心が高い女性異性愛者は、レズビアンに対して否定的態度を示すことで女性集団成員として得られる自尊心を維持する一方、マイノリティを含む他者一般に対して思いやりを持って接するといった共同性も内在化しており、レズビアンに対してより好意的な態度を示すと考えられる。つまり、女性異性愛者においては、レズビアンに対して否定的態度を示すことでジェンダー自尊心を維持する心理機制と、ジェンダー自尊心が肯定的態度を促進するといった相反する心理機制が備わっている可能性がある。その結果、相対的には男性異性愛者のゲイに対する態度よりも、女性異性愛者のレズビアンに対する態度の方が肯定的になるといえる。

**各研究の結果** 第1章の研究1, 研究2では、主に社会的アイデンティティ理論の枠組みを用いた Falomir-Pichastor & Mugny (2009) の追試研究を行った。結果にややばらつきはあったものの、男性異性愛者は先行研究と同様、男性としてのジェンダー自尊心を維持防衛するためにゲイに対して否定的態度を示すといった心理機制を支持する結果がみられた。予測していなかった傾向として、ゲイとの心理的類似性が低い場合に異性愛者と同性愛者が生物学的に異なると伝えられる（架空の解説文が提示される）とジェンダー自尊心が高いほど社会的容認度が高くなっていたが、集団間の弁別性が明確になったことで、ジェンダー自尊心を維持防衛す

るための心理機制が弱化したためであると考えられる。一方で、女性異性愛者はジェンダー自尊心が高いほどレズビアンに対して寛容な態度を示すといった関係がみられた。これらの結果は「性役割規範の特性仮説」を支持する結果といえる。

第2章の研究3, 研究4, 研究5では、同性愛者に対して形成されているステレオタイプ（同性愛者は性指向以外の男性らしさや女性らしさといった性役割規範においても逸脱しているという信念）によって向けられる否定的態度とジェンダー自尊心の関連に焦点をあてた。ゲイは一般的な女性と、レズビアンは一般的な男性と似ているといったように、同性愛者はジェンダー逆転した特徴を持つと知覚される傾向にある(Kite & Deaux, 1987)。同性愛者は性役割規範を逸脱している（というステレオタイプ）によって向けられる否定的態度においても、異性愛者のジェンダー自尊心による影響が男女では異なるのか検証することとした。男性異性愛者においては、ゲイが一般的な男性らしさから逸脱した存在と知覚することで同じ集団成員として扱われたくないといった動機づけが強くなり、否定的態度をより一層強化すると推察される。つまり、男性異性愛者のジェンダー自尊心は女性的なゲイへの否定的態度を促進することで、同性愛者のステレオタイプによる否定的態度も女性異性愛者より男性異性愛者において顕著になるだろう。一方、「性役割規範の厳格性仮説」に基づけば、女性異性愛者においても男性異性愛者と同様に、ジェンダー逆転したような特徴を示すレズビアンに対しては同じ集団成員として扱われたくないといった動機づけが強くなり、ジェンダー自尊心が高いほど男性的なレズビアンに対してより否定的態度を示す可能性がある。「性役割規範の特性仮説」に基づけば、女性異性愛者においてみられるジェンダー逆転したレズビアンへの否定的態度は、ジェンダー自尊心とは独立した性役割規範からの逸脱に対する批判的態度かもしれない。むしろ、レズビアンに対して寛容な態度を示すことがジェンダー自尊心の維持につながるといった心理機制が、男性的なレズビアンに対する否定的態度を抑制している可能性が考えられる。

実証研究の結果、「性役割規範の厳格性仮説」「性役割規範の特性仮説」それぞれの予測に即した結果がみられるなど、どちらの仮説がより支持されるかを結論づけることはできなかった。ただし、男性異性愛者と女性異性愛者では異なる傾向が示唆された。ジェンダー自尊心が高い男性異性愛者は、趣味や行動などが一般的な意味で男性的でないゲイに対してより一層否定的な反応を示していた。また、ゲイとの類似性を高く知覚している男性異性愛者において、ゲイの外見は一般男性と変わらず異性愛者と同性愛者を見た目で判断することはできないといった（架空の）情報が与えられると、ジェンダー自尊心が高いほど否定的態度を示す関係がみられた。一方、女性異性愛者においては、趣味や行動などが自身とは異なるタイプのレズビアンへの否定的反応はジェンダー自尊心が高い場合に抑制されていたが、レズビアンの外見が男性的であると知るとむしろジェンダー自尊心が高いほど否定的態度が促進されていた。このように、同性愛者がどのような特徴を持つと知覚するか、その内容に応じて男性異性愛者と女性異性愛者のジェンダー自尊心による影響は異なり、また女性異性愛者においてもレズビアンを男性的であると知覚した場合にはジェンダー自尊心が否定的態度の促進要因になりうるということが示唆された。

第3章の研究6, 研究7では、異性愛者が親友からカミングアウトを受けた後の態度変容における性差について、ジェンダー自尊心がどのように機能しているのかという観点から検討を行った。その結果、親友からカミングアウトを受けた後、同性愛者一般に対する態度が好転するといった態度変容は、男女ともにジェンダー自尊心が高い場合により顕著にみられた。また、カミングアウトを受けたことで、他者から自身も同性愛者だと思われるかもしれないといった社会的感染不安が喚起され親友に対して回避的になるといった媒介過程が確認された。

男性異性愛者ではジェンダー自尊心がそうした回避的反応の促進要因となり、女性異性愛者ではジェンダー自尊心が抑制要因となっていた。こうした結果から、カミングアウト場面においては「性役割規範の特性仮説」に基づく心理機制がみられたといえる。ただし、ジェンダー自尊心が、男性異性愛者、女性異性愛者いずれにおいても同性愛者一般に対する肯定的態度を促す側面が確認されるなど、男性異性愛者においてもジェンダー自尊心が高いほど同性愛者に対する肯定的態度を規定する可能性が窺えた。

**同性愛者に対する否定的態度の解消に向けて** 終章では、本論文の各研究結果を概観し考察を行った。各研究結果にばらつきがあることや、同性愛者に対する態度次元によっても結果が異なるといったことから、当初の「性役割規範の厳格性仮説」および「性役割規範の特性仮説」を棄却または採択できるわけではなかった。ただし、予測とは異なる結果も含め、男性異性愛者と女性異性愛者では、同性の同性愛者に対する態度においてジェンダー自尊心がもたらす効果が異なっていることが明らかになったといえる。したがって「性役割規範の特性仮説」を発展させ、同性愛者に対する態度における性差について明らかにしていくことが重要だろう。

なお、現在の男女や同性愛を取り巻く社会構造などを踏まえると、男性異性愛者にとっては、同性愛者に否定的態度を示すことが性指向だけでなく男性性に関する正当化であり、現状の男性優位な社会構造を維持する方略の一つなのかもしれない。一方、女性異性愛者においては既存の性差別構造を覆す方略として同性愛者に対して肯定や容認的態度を示しているのかもしれない。ただし、レズビアンが男性的な特徴を示すと、たちまちジェンダー自尊心が高い女性異性愛者ほど否定的な態度を示す。男性性を主張する存在としてレズビアンを知覚したことで否定的反応を向けているとするならば、そもそも同性愛者に対して肯定的態度を示す背景に、現状の性差別や男女不平等の是正といった心的メカニズムがあることと整合する。このように、同性愛者に対する態度の性差を理解するうえでは、「男性らしさ」や「女性らしさ」といった男女に求められる性役割規範の差異や、性別という枠組みにおいて社会的マジョリティである男性と、社会的マイノリティである女性といった社会構造も考慮する必要がある。性役割規範や社会的立場の違いが、同性愛者に対して否定的態度または肯定的態度を示す動機づけの差異をもたらしていると考えられるからである。

こうした考察を踏まえ、同性愛者に対する偏見や差別を解決するために本論文から得られた示唆の一つは、伝統的な性役割規範の解体の必要性だろう。我々は無意識のうちに性役割規範に晒され、その社会的構造をも内在化し他者に対する態度を規定している。社会的マジョリティ集団に属する人々は自身の立場を維持防衛するために社会的マイノリティ集団に否定的態度を示し、社会的マイノリティ集団に属する人々は既存の社会構造を崩すために別の社会的マイノリティ集団に肯定的態度を示すのかもしれない。そうした対処方略の応戦ではなく、社会構造なども含めた既存の性役割規範を様々な方法で解体し、共生社会の実現に向けて再構築していくことが重要といえる。最後に、本論文の問題点・限界として以下の3点があげられる。第1は、ジェンダー自尊心などの質問項目の抽象性である。第2は、男性異性愛者のゲイに対する態度においてジェンダー自尊心以外の要因の影響力が考えられることである。第3は、自身の性別に基づく自尊心の防衛機制以外の要因や異性の同性愛者への態度について実証研究を行っていないことである。これらについても、今後検討を重ねていく必要がある。

## 引用文献

Bakan, D. (1966). *The duality of human existence: An essay on psychology and religion*. Chicago: Rand McNally.

- 土肥伊都子・廣川空美 (2004). 共同性・作動性尺度(CAS)の作成と構成概念妥当性の検討—ジェンダー・パーソナリティの肯否両側面の測定— 心理学研究, 75, 420-427.
- Falomir-Pichastor, J. M., & Mugny, G. (2009). "I'm not gay....I'm a real man!": Heterosexual men's gender self-esteem and sexual prejudice. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 35, 1233-1243.
- Herek, G. M. (1986). On heterosexual masculinity: Some psychological consequences of the social construction of gender and sexuality. *American Behavioral Scientist*, 29, 563-577.
- Herek, G. M. (1993). On heterosexual masculinity: Some psychological consequences of the social construction of gender and sexuality. In L. D. Garnets & D. C. Kimmel (Eds.), *Psychological perspectives on lesbian and gay male experiences* (pp.316-330). Columbia University Press.
- Kite, M. E., & Deaux, K. (1987). Gender belief systems: Homosexuality and the implicit inversion theory. *Psychology of Women Quarterly*, 11, 83-96.
- Kite, M. E., & Whitley, B. E., Jr. (1996). Sex differences in attitudes toward homosexual persons, behaviors, and civil rights: A meta-analysis. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 22, 336-353.
- Tajfel, H., & Turner, J. C. (1979). An integrative theory of intergroup conflict. In W. G. Austin, & S. Worchel (Eds.), *The social psychology of intergroup relations* (pp.33-37). Monterey, CA: Brooks/Cole.

## 論文審査結果の要旨

本論文は、性的マイノリティに対する偏見や差別が存在するという現状をふまえ、性的マイノリティの中の同性愛者に焦点をあて、同性愛者に対する偏見や差別をいかに解決していけるのか、その糸口を見つけることを目的としている。先行研究では、女性異性愛者は男性異性愛者よりも、同性の同性愛者に対して肯定的であることが確認されているが、それはなぜなのか。本論文は、その背景にある心理機制を明らかにすることで、同性愛者に対する偏見や差別の解決、さらに様々なセクシュアリティの人たちが共生できる社会の実現に向けてどのようなアプローチが有効であるのかを、日本の大学生を対象とした質問紙実験を通して考察している。

序章では先行研究の議論が整理されているが、特に、男性異性愛者が同性愛者に対して否定的態度を示す理由について、Falomir-Pichastor & Mugny (2009) が提案した社会的アイデンティティ理論に基づく心理機制に注目している。すなわち、人には自尊心を維持しようとして、外集団を内集団よりも否定的に評価する心理機制が備わっており、その結果、偏見や差別などの集団間葛藤が生じるとするものである。先行研究では、男性異性愛者は男性集団成員であることで得られる誇りや自信（ジェンダー自尊心）を維持するために同性愛者に対して否定的態度を示す傾向が確認されているが、女性異性愛者については、明確な関係は報告されていない。本論文では、女性異性愛者においても男性異性愛者と同様に、同じ集団成員であるレズビアンに対して否定的態度を示すことで、ジェンダー自尊心を維持防衛するといった心理機制が備わっているが、そうした否定的態度を抑制している要因があるのではないかと考えている。同性愛者に対する態度における性差が生じる要因について、本論文では「性役割規範の厳格性仮説」および「性役割規範の特性仮説」の2つの仮説に集約している。第1章から第3章の各研究（研究1～研究7）を通じてこの2つの仮説を検証し、終章では各研究結果を踏まえて、同性愛

者に対する偏見解決に向けての考察を行っている。

**性役割規範の厳格性仮説** 人々は伝統的に男性らしい男性や女性らしい女性といった一定の枠組みから逸脱する（と知覚される傾向にある）同性愛者に対して否定的態度を示す。さらに一般社会においてジェンダーに対する信念は女性よりも男性のほうが厳格といわれている。これらの知見に基づくと、女性異性愛者ではジェンダー自尊心を維持防衛するためにレズビアンに対して否定的態度を示す動機づけが男性異性愛者よりも弱くなることから、男性異性愛者のゲイに対する態度よりも、女性異性愛者のレズビアンに対する態度の方が肯定的になるという性差が生じる。

**性役割規範の特性仮説** 性役割規範の厳格さに加え、性役割規範の特性が男女間で異なることから同性愛者に対する態度に性差が生じるとする仮説である。女性性の中核となるものは共同性とされており、その共同性には思いやりをもって人と接することが含まれる。この女性性の特徴を考慮すると、ジェンダー自尊心が高い女性異性愛者は、レズビアンに対して否定的態度を示すことで女性集団成員としての自尊心を維持する一方で、マイノリティを含む他者一般に対して思いやりを持って接する共同性も内在化しており、レズビアンに対してより好意的な態度を示すと考えられる。その結果、男性異性愛者のゲイに対する態度よりも、女性異性愛者のレズビアンに対する態度の方が肯定的になるという性差が生じる。

序論では、先行研究の知見が適切に整理されており、そこから2つの仮説を導き出している。これらの仮説は、常に異なる予測を行うわけではないが、同性愛者に対する態度の心理機制における性差を表すことのできるオリジナリティの高いものとして評価できる。

第1章（研究1、研究2）では、Falomir-Pichastor & Mugny（2009）の研究を一部追試する形で行われた。その結果、男性異性愛者ではジェンダー自尊心が高いほどゲイに対する態度が否定的となり、女性異性愛者ではジェンダー自尊心が高いほどレズビアンに対する態度が肯定的となった。この結果は「性役割規範の厳格性仮説」では説明できないことから「性役割規範の特性仮説」が妥当と判断された。ただし、研究1と研究2の間で一貫しない結果が得られた部分や、2つの仮説のうちのいずれにおいても想定されない結果が得られた部分があった。その原因については本論文では特定されていないが、今後の研究で検討が必要とされる要因については、詳しく整理されており、妥当な考察と展望がなされていると判断できる。

第2章（研究3～研究5）では、外見や行動的特徴においてゲイは一般的な女性と、レズビアンは一般的な男性と似ているといったように、同性愛者は「ジェンダー逆転」した特徴を持つと知覚される傾向にあるが、このようなステレオタイプに起因する否定的態度においても、異性愛者のジェンダー自尊心による影響が男女間で異なるのか否かを検討している。実験の結果、2つの仮説のどちらか一方のみが妥当であることを示す結果は得られなかった。ただし、同性愛者がどのような特徴を持つと知覚するかに応じて男性異性愛者と女性異性愛者に対するジェンダー自尊心の影響は異なることが示された。第2章の総合考察では、研究3～研究5の結果をまとめ、2つの仮説の妥当性について検討がなされているが、ジェンダー自尊心と同性愛者に対する態度との関係において、男性異性愛者と女性異性愛者の間で異なる心理機制が働くことを示唆する結果が得られていることから、「性役割規範の特性仮説」が妥当と判断している。ただし、結果のばらつきについてどのような説明が可能であるかは残された問題である。この問題については終章で論じられており、概ね適切に論じられている。

第3章（研究6、研究7）では、異性愛者が親友からカミングアウトを受けたと想定した場合の態度変容における性差について、ジェンダー自尊心がどのように機能しているのかを検討している。その結果、親友からカミ

ングアウトを受けた後、同性愛者一般に対する態度が好転するといった態度変容は、男女ともにジェンダー自尊心が高い場合により顕著にみられた。また、カミングアウトを受けたことで、自身も同性愛者だと思われるかもしれないといった「社会的感染不安」が喚起され、親友に対して回避的になるという媒介過程が確認された。回避的反応について、男性異性愛者ではジェンダー自尊心が促進要因となり、女性異性愛者ではジェンダー自尊心が抑制要因となっていた。このような結果から、カミングアウト場面においては「性役割規範の特性仮説」に基づく心理機制が働いていたと言える。ただし、ジェンダー自尊心が男性異性愛者と女性異性愛者のいずれにおいても、同性愛者一般に対する肯定的態度を促すことが確認されるなど、男性異性愛者においてもジェンダー自尊心が同性愛者に対する肯定的態度を促進する可能性が確認された。すべての結果が仮説を支持するわけではないが、カミングアウトという具体的場面において、ジェンダー自尊心と同性愛者に対する態度について、「性役割規範の特性仮説」を支持する結果が得られたことは、この仮説の一般性を示すものであり、本論文の仮説の評価に大きく貢献している。

終章では、本論文の各研究結果を概観し、総合考察が展開されている。結果にばらつきのある研究があること等から、2つの仮説の一方を採択できるわけではない。しかし、予測と異なる結果も含めて男性異性愛者と女性異性愛者では、同性の同性愛者に対する態度においてジェンダー自尊心がもたらす効果が異なっていることが明らかになった。したがって「性役割規範の特性仮説」を発展させ、同性愛者に対する態度における性差について明らかにしていくことが重要と結論づけられている。

さらに、現在社会における男女や同性愛を取り巻く社会構造という観点から、実験結果の解釈が試みられている。男性異性愛者にとっては、同性愛者に否定的態度を示すことが男性優位な社会構造を維持する方略の一つと考えられ、女性異性愛者は、既存の性差別構造を覆す方略として、同性愛者への肯定的・容認的態度を示した可能性が指摘されている。また、女性異性愛者は、ジェンダー自尊心が高いほど、男性的な特徴を持つレズビアンに対して否定的な態度を示したことから、女性異性愛者が同性愛者に対して肯定的態度を示す背景には、現状の性差別や男女不平等の是正に関する心的メカニズムが存在することを示唆するとしている。ここから、同性愛者に対する態度の性差を理解するには、「男性らしさ」や「女性らしさ」といった男女に求められる性役割規範の差異や、性別という枠組みにおいて社会的マジョリティである男性と、社会的マイノリティである女性といった社会構造も考慮する必要があること、その理由として、性役割規範や社会的立場の違いが、同性愛者に対して否定的態度または肯定的態度を示す動機づけの差異をもたらしていると考えられるためと考察している。このように、実験結果を研究内で直接扱った変数との関係に基づいて考察するだけでなく、社会構造といったマクロな変数との影響関係について考察することは、本研究で得られた知見が、個人レベルの「ジェンダー自尊心」の問題だけではなく、個人を超えた社会レベルの問題と関連することを示唆するものであり、本論文で取り上げた問題を理解・解決するには、様々な観点やレベルでの視点・介入が必要であることを示している点で重要である。

終章の最後の部分では、同性愛者に対する偏見や差別を解決するための方法について考察がなされている。同性愛者差別の基礎には伝統的な性役割規範があると考えられるが、これを法律の見直し、学校教育、社会運動など、様々な観点から解体していく必要があるとし、その具体的方法としてメディアによる発信や社会制度の整備などに注目している。ここで提案されている解決方法は、先行研究に基づき適切に導き出されたものと判断できるが、本論文で明らかにされた知見との関係が必ずしも明確ではないものもある。本論文の最後の部分では、本研究の限界と今後の課題が適切にまとめられており、それらは同性愛者に対する態度についての心的機制のさら

なる解明と、同性愛者に対する偏見・差別の解消に向けた具体的方法の発明をもたらす今後の研究にとって、重要な知見と言える。

以上の所見により、本論文は、大阪公立大学博士（文学）の学位を授与するにあたいするものと認められる。